

(加世田市内山田)

### 位置と環境

志風頭遺跡は、加世田市の中部に位置する標高約60mのシラス台地の南西端にある。このシラス台地の周辺には、万之瀬川の支流である加世田川と武田川が流れている。

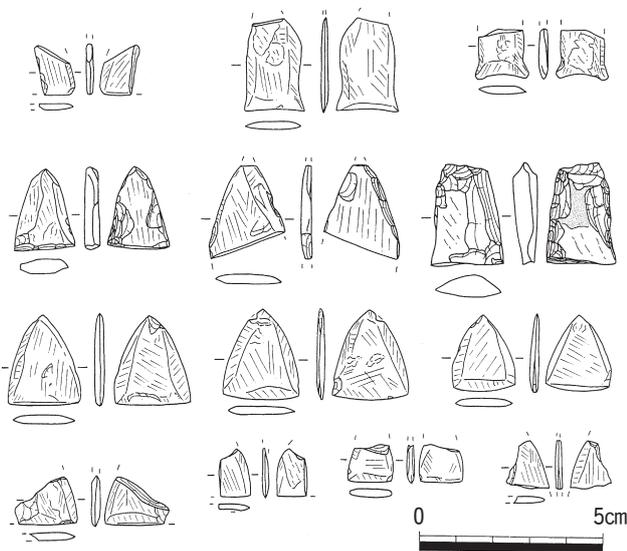
### 調査の経緯

志風頭遺跡は、道路の舗装・拡幅工事計画に伴い発見された。その後、平成8年に本市教育委員会が調査主体となり確認調査が行われ、翌平成9年には約300㎡について本調査を実施した。

### 遺構と遺物

志風頭遺跡では、<sup>14</sup>C年代測定で約6,400年前とされるアカホヤ火山灰の直下となるⅢ層と、<sup>14</sup>C年代測定で約11,500年前とされる薩摩火山灰層の直下となるⅤ層の2つの遺物包含層が確認されている。

Ⅲ層からは、縄文時代早期初頭から前葉に位置付けられている岩本式・前平式系の土器群が出土し、これらに伴って154点の石器類も出土している。石器の多くは打製石鏃や磨石・石皿といった一般的なものだが、この時期としては珍しい全体を研磨して形作った石鏃が製品・半製品あわせて34点出土している。このほか、石蒸し調理場のあとと考えられる集石が8基、性格不明の土坑が1基確認されている。



第2図 磨製石鏃



第1図 志風頭遺跡の位置

Ⅴ層からは、旧石器時代終末期から縄文時代草創期にかけての遺物・遺構が出土している。旧石器時代の遺物には、ナイフ形石器や三稜尖頭器がわずかに見られるほか、細石刃と呼ばれるごく小さな石器475点とその素材となる細石刃核類88点がある。

縄文時代草創期の遺物には、特徴的な太めの粘土ひも（隆帯）を主な文様とした隆帯文土器と、打製石族（ヤジリ）や土掘道具として使用された打製石斧、様々な用途に使われた刃物と考えられるスクレイパー類などがある。遺構では、縄文時代草創期であることが確定しているものに煙道付き炉穴が7基、旧石器時代終末期～縄文時代草創期のいずれかの時期と考えられるものでは集石3基、大型の土坑2基のほか、ハンマーとして使用した棒状の石を重ね置いた遺構1基がある。煙道付き炉穴は2つの穴が地中のトンネルでつながった構造をもつ遺構で、動物や魚の燻製づくりの施設とする考えが有力である。集石はいずれも火熱を受けていることから、石蒸し調理の跡と考えられる。2基の大型土坑は検出面からの深さがそれぞれ1.6m、1.2mと深さがあり、床面には複数の小穴があったことなどから動物を捕らえるための落とし穴である可能性が高い。

### 特徴

Ⅲ層出土の遺物では、全体を研磨して形作った石鏃が注目される。全磨製の石鏃は一般的には弥生時代に見られる遺物であり、縄文時代の古段階（縄文時代早期の前半）のものは全国でも鹿児島県においてまれに発見されるだけできわめて珍しい。Ⅴ層出土の遺構・遺物では、縄文時代草創期の煙道付き炉



写真1 隆帯文土器の出土状況



写真2 接合・復元された隆帯文土器

穴と、その炉穴から出土した大型の隆帯文土器が注目された。本遺跡の煙道付き炉穴は、鹿児島市掃除山遺跡や加世田市柵ノ原遺跡と並んで国内でも古い出土例である。また、その中から出土した隆帯文土器も口径42cm高26.5cmと当時としてはかなり大きなものである。このような遺跡のあり方は、人類が遊動生活から定住生活へと移行した画期のすがたを示している。

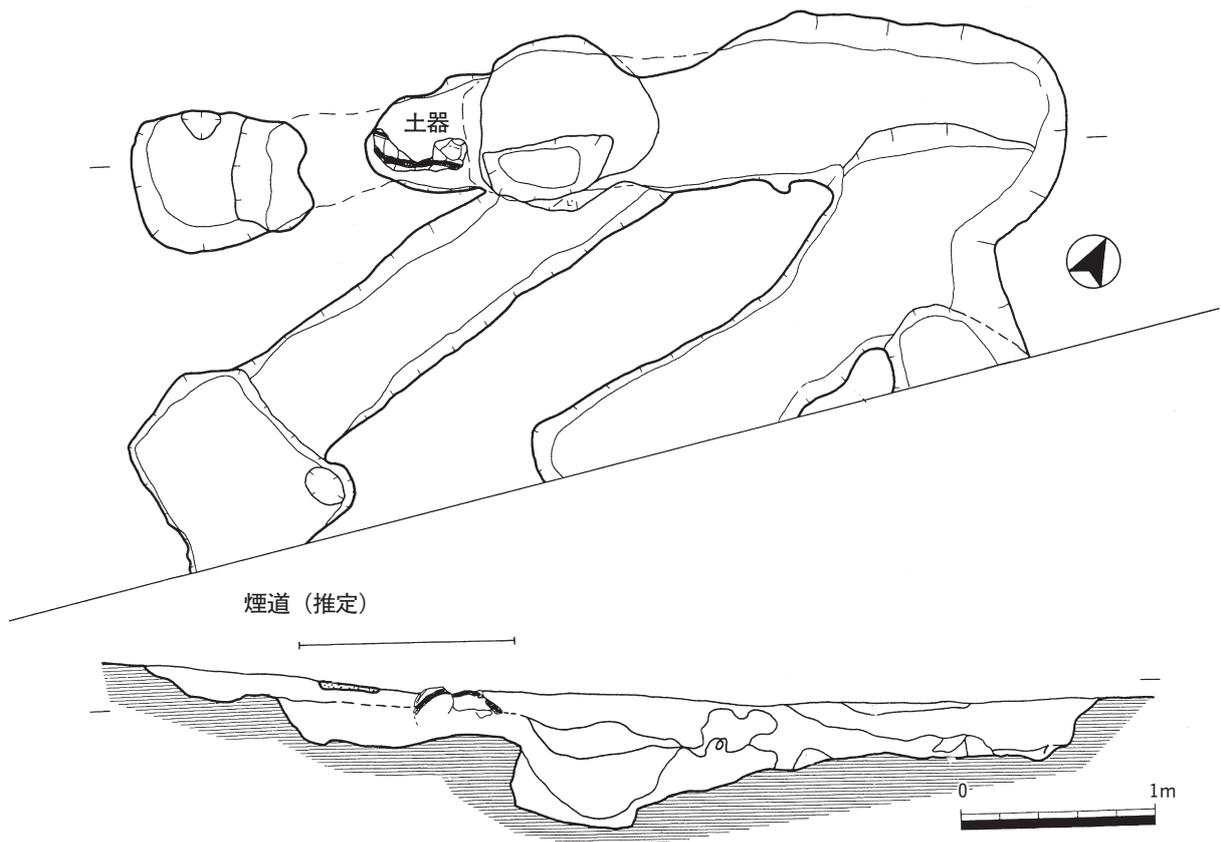
#### 資料の所在

出土遺物は、大型の隆帯文土器は加世田市郷土資料館に展示され、そのほかの遺物は加世田市文化財センターにおいて保管されている。

#### 参考文献

加世田市教育委員会1999「志風頭遺跡・奥名野遺跡」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』16

(福永裕暁)



第3図 1号煙道付き炉穴群